書評

『開港場・新潟からの報告』青柳正俊（著）

（考古堂書店 2011年全234ページ）

長岡技術科学大学 准教授　綿引 宣道

Ⅰ　序

新潟港の開港については国内の資料に基づくところが多いが、本書は新潟港の開港に至るまでの略歴とイギリスの外交官から見た開港後の10年間が書いてある。新潟港は安政年間に諸外国との条約により国際港として用いることが決まったが、その背景にはなるべく江戸から遠く、かつ大型船があまり近づけないような構造でかつもし外国軍が上陸しても江戸に到達するまでに時間が稼げる場所として、あくまでも国防上の理由で選ばれたとういうのが定説である。実際に遠浅の海で大型船が近づけず、冬は蒸気船以外船の進行もままならず、当時江戸まで10日かかる新潟を選んだのはまさに当初の目論見通りであった。

ところが明治政府に政権が変わり本格的に国際取引が始まると、この条件が新潟港発展の足を引っ張ることになる。純粋に貿易の観点からみれば最悪ではあるが、本書を読み進めて行くと江戸幕府の選択は間違ってはいなかったのではないかという気がしてくる。例えば、外交官の議会への報告書の内容についてであるが、信濃川の流域の特産物の調査までは分かるが、貿易を主目的に情報を収集しているはずが、学校、病院や刑務所、果ては軍の基地の広さといった直接的には何の関係もない情報まで収集し報告書として上がっている。

明治維新直後は函館五稜郭立てこもり（明治2年）や西南戦争（明治10年）があり、外国船の米の取引開始と同時に価格の高騰、コレラの流行があり、これらを外国人のせいだと焼き討ちをしかけようとした事件が起きている。この状況を考えて行くと、事件をきっかけに植民地化のための予備調査の位置づけもかなりあったであろうと評者は邪推してしまう。実際に記述内容を見るとコロニアリズム的な文化人類学的要素を含んでいる。つまり新潟港の周辺および信濃川流域の町の様子が描かれており、今となってはその当時の空気感が垣間見ることができる。

Ⅱ　本書の概要

鎖国を続けてきた徳川幕府は寄港地であった新潟港を国際港へ変更することを決め、国際港として実際に開かれる前に明治維新となり、混乱状態のまま開港に至った。その混乱状態の中イギリス領事館が開設された明治2年（1869年）から明治12年（1879年）までをイギリス領事の目から観察し、本国へ報告したものを翻訳したもので、報告は明治12年で終わっている。

本書の概要は以下のとおりである。

1　開港場の始動 1869年
2　開港初年の港の様相　1869年
3　新潟港の可能性と限界 1870年
4　港の発展を阻む実情 1872年
5　越後の様子と停滞する港・1　1874年
6　越後の様子と停滞する港・2　1875年
7　発展したこと・変わらぬこと　1876年
8　離港に際して　1877年
9　開港10年目の現状　1878年
10　遠ざかる外国交易　1879年

訳者は、この期間を第1期：明治2年～3年の新潟港の「試用期間」、第2期：明治4年～10年の水深の問題から交易の停滞、第3期：明治11年の清の飢饉により米の大量輸出で活気を取り戻し、第4期：明治12年～18年で外国人商人が徐々に減っていく時期に分けている。これらの翻訳の後に、この報告書が書かれた「舞台裏」が書かれている。歴史に不案内な方は、後半の「舞台裏」から読むことをお勧めする。

Ⅲ　開港当時の国際環境

まず当時の国際状況から整理してみよう。新潟港が国際港として開かれた年は、清では第二次アヘン戦争から12年後、朝鮮半島では攘夷運動の最中[1]で、この本で取り上げられている10年間の間にアメリカ商船ジェネラル・シャーマンによる不法上陸と住民殺害事件[2]と極東は緊張状態であった。

先述したように開港を決めた幕府も簡単に外国艦隊が上陸できないような地域として遠浅の海にある新潟港を開港したといわれている。確かに大型軍艦が接岸できない半面、輸送の観点から見ると川船の延長線のような小さな船（平底船）しか入り込めない、すなわち貿易をするには非常に手間のかかる港である。さらに港を管理する奉行所を港から約20キロ離れた現在の阿賀野市水原に置いている。このことからも、いかに外国船を警戒し遠ざけようとしていたかが分る。実際に横浜では、パキスタン人の大英帝国の傭兵150人が駐屯していた(石塚2011)。日本側の警戒心と緊張感は計り知れなかったであろう。

とはいうものの、外国から見ればいくら使いにくいとは言え、開港したのだから使えるものは使おうと貿易が始まる。イギリスは貿易拡大を名目に領事館を置いたと思われる。それと同時に植民地獲得をうかがう絶好の機会を得たことになる。この観点から見ると、ここに記載されていることはかなり忠実に描写をしていると推測できる。

Ⅳ　貿易港としての価値

10通の報告で一貫しているのが、新潟港の使いにくいことへの不満である。当初から遠浅で大型船舶の接岸ができないため、荷物を小舟に乗せ換えて運んでいたこと、当時の日本人商人も見附、栃尾、長岡近辺の絹や綿製品を新潟港に運ばずに横浜港から出していた(p112)事から見ても、かなり使い勝手が悪かったようである。当初から横浜や神戸で取引される価格との違いに着目していた。貿易を開始した当初は、江戸末期と同様金と銀の国際レートと国内交換比率で外国商人は儲かっていたようである。同じ商品であっても横浜と新潟では価格差があったようで、これだけでも利益は出たようである。その一方で、紙幣(藩札と太政官札のことか)の乱発と贋金が横行しており、結局のところどれほど利益を得ていたのか微妙であったようだ(p19,21)。早くも明治2,3年にはオランダとアメリカ公館は撤退し、一時的に取引量は増加するものの、徐々に減少しついには年に2-3隻しか外国籍の船が来なくなる。

次に注目すべきは、郵便などの通信手段の速度である。横浜あるいは東京からの郵便が夏で3日、冬場でも4-5日で届いていることが記載(p117)されており、情報収集活動にかなり注意していたことが分る。

明治7年の報告では、報告者のガビンズ自らが三国峠越えを行い、途中の塩沢やその周辺の金銀鉛石炭鉱山について報告をしている(p86)。この報告の成果であろうか、外国製の鉱山用の機械が納品されたことが記載されている(p166-1170)。

結局、イギリスは明治14年に、ドイツも翌年には貿易港としての価値がないとして撤退していった。

Ⅴ　評者の視点

評者は「植民地獲得活動の準備資料」「中越地方の経済に関する史料」として読んでいきたい。というのは、176ページから30ページほどの「報告の裏舞台」となる著者のオリジナルの文章であるが、報告書には全く記載されていない事件が数多くの記載がある。例えば、外国船が新潟産の米を県外に運ぶようになった頃を同じくして米の値段が急騰した。そこで一般民衆による外国人焼き討ち未遂事件(p188)、1879年のコレラ大発生による民衆の暴動が発生している。また、信濃川の改修工事に徴用された農民が作業の厳しさを訴え暴動をおこしたが、これによって工事が遅れたことがイギリス側の文書には一切記載されていない。このような重要な事件があるにもかかわらず、報告書には記載されていなかった事は、そこに何らかの意図を感じざるを得ない。

注目すべきは、まだ日本政府が統計の重要性を理解し、正確なデータを日本国政府が把握する前から新潟港全体の統計を取っていた点である。当初は運上所からの資料を融通してもらっていたようだが、外国貿易については

---

[1] 丙寅教獄(1866－1872年)と呼ばれるカトリック信者8000人の殺害事件が発生し、フランスの宣教師も殺害されたことから報復による江華島一部占拠(1866年)される事件が発生した。

[2] ジェネラル・シャーマン事件は、アメリカの民間の船が半角島に上陸し住民を殺害したため平壌監司が指揮して反撃した。これに対してアメリカが謝罪を求めて朝鮮を攻撃することとなる。

1871 年からは運上所ではなく外国人から個人的メモを総合してまとめている(p46)。その後港での取引にとどまらず、どのような商品がどこからどのくらい運ばれてきたか、どのくらいの価格で取引されていたのかを詳細に調べている。港周辺の集落の人口規模と職業ごとの従事者数も概算ながら記載されている。営所の規模、道路の整備状況や病院、刑務所学校の整備状況[3]から民度を測っていたようだ(p92, 101, 111-116)。これは陸軍参謀本部陸地測量部が大まかな人口を把握し比較的詳細な地図を作成したのが明治 27 年であること、詳細な人口を把握しようとし国勢調査が国会で決議されたのが明治 29 年、実施は大正 9 年であることを考えれば、かなり入念に調査をしていたことが分かる。

さらには宗教の信者に関しても記載があり、宣教師の派遣による情報収集を検討していたことがうかがえる(p101)。

本書ではあまり重視されていないが、信濃川流域の記述も非常に興味深い。新潟港に運ばれてくる商品の中には綿花や紅などのほか、地下資源もかなりあった。たとえば弥彦村の銅山や十日町の銀山、長岡の石油などの記載がある。実際に領事自らが現地を訪れ、聞き取り調査を行っている。特に地下資源に関する記述があるのは 1876 年で、鉱山用の機械の売り込みを検討していたようだ。

特に長岡では石油の商業ベースでの採掘には否定的である郡長（総合的に判断すると三島億二郎か？）の談話があり、軽工業が長岡の産業を支えるというような工業化が進む前の状況に関してと女紅場、米社[4]など(p147-152)、ランプ会の成果の記述が見られる。

Ⅵ　評価

当時の周辺諸国の状況と国力を比較しながら恐る恐る中途半端な開港をしていた。日本は輸出を積極的に考えていた訳ではなく、むしろ金銀の流出を防止するために輸入を防止する経済思想が強かったようである。その成果(？)もあってか本書のもととなっている報告書は一貫して遠浅の海で大型船が接岸できないことを嘆いている。一時期、改修工事がおこなわれるが非効率なやり方にも一貫して批判している。

この報告書が書かれた時期は、長岡ではランプ会が開かれ(明治 3～9？年)、その後地下資源を有効活用して国益を守る趣旨で信濃川流域の企業家達が集まってできた誠之会(明治 11～20？年)があったことから判断すると、政府の外国との貿易取引量を低く抑えたい意図が見える。その意図をイギリス側が理解できなかったとは思えない。それでも他国と比べて長く領事館を置いた理由を考える必要がある。その理由を評者は、植民地化の準備であろうと考える。それゆえ報告書はコロニアリズム的人類学のような側面が見られるのであろう。今となってはそれが却って歴史を研究する上で重要なこと、即ち多面的にみることと、その土地の空気感とその時代の日常を知ることができるのである。

一方、現在の新潟市と長岡市は信濃川の度重なる氾濫および地震といった災害と第二次大戦の爆撃によって貴重な資料が奪われてきた。そもそも当事者視点に立った史料そのものが極端に少ない状況にある。また、この当時から 150 年近く経過した今となっては、当時の日本人の感覚になりきることが困難であり、ある意味外国人によって書かれたからこそ理解できるものもあろう。その点においても貴重な史料である。

参考文献

石塚裕道 2011『明治維新と横浜居留地』吉川弘文堂
色川大吉 1992『歴史の方法』岩波書店
長岡市 1964,『長岡市史資料集』, 長岡市
廣井一 1929『明治大正北越偉人の片鱗』北越新報社

[3] 新潟外国語学校は明治 7 年に設立であるが、本書(p36)によれば、明治 2 年には英語を教える学校が政府によって作られている。
[4] 長岡米穀取引所のことか。